

明光

第九卷第六號

噫 弘誓の強縁は
 多生にもまうあひがたく
 眞實の淨信は
 億劫にも獲がたし
 たま／＼行信を獲ば
 遠く宿縁をよるこべ (御大典)

大眞 日本 明光 團本 部發 行

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和二年六月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光・明 第九卷第六號

定價金拾錢

遊蕩無頼の徒も「俺にまことがあるものか」と云ふ。
 聖觀音も亦「まことたはまことあることなきに」といふ。
 一体何處がちがふのか。聖人の態度には跪いた謙虛さがあり、他
 には高慢邪見しかない。
 一は眞實をふみにじつた姿であり、聖人は眞實そのもの、遊蕩者
 である。
 一は「眞實なれ」との金看板の前にすゝり泣く者の態度であり、
 一は虚偽のまゝの無反省にねむれる者である。
 聖人は如來の眞實に救はれて、煩惱を痛む者の合掌であり、
 他は眞實を忘れて、潮惑の淵に沈める者の愚痴である。
 一は眞實の熱愛者であり、一は眞實にはむかふ者である。
 (聖光二卷六号)

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和二年六月十五日發行(毎月一回十五日發行)

◆合掌宣言

- 第一、我は之れ久遠劫來の業苦に悩む。されど、傷み痛み纏める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。
- 第二、我はこれ曾無二善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願方に生きたまふみ親。罪惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひたまふ。
- 第三、惠まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する憐しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。
- 第四、希くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからばれて、無我報謝の歡喜に生きん。
- 第五、四海の信心の人は皆兄弟。其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、策勵して、相愛に生きん哉。

◆本領

毀譽褒貶に動するなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。
救はれたる者は立つて、全人類救済のために、熱き血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

巻頭の叫び

み佛様！ 私は今至尊の前にひれ伏して名號をよんでゐます。
ほめられてゐるのもほんどうの私ではありませぬ。
そしられてゐるのもほんどうの私ではありませぬ。
念佛して合掌してゐるこの私のみがほんどうの私であります。
至尊よ！ 私を招喚あそばさす如來よ！
多くの時私はふざけてゐます。たかあがりしたり自卑したり、
しかし我があなに歸命した時、私の心はおちつきます。
かぎりなきひろがりとうるほひに私の心はほゝほみみます。
嚴肅な心持が私に精進せよとささやきます。
私は唯あなたによつて生かされてあります。自然に。平和に。

超越と隨順

住岡 狂風

宗教は道徳を超越したものである

前號では價值生活としての宗教のお話を致しましたが、本號では更に宗教の生活についてお話します。

前號で申しましたが如く價值をはなれては人生はありませぬ。生活の上に高い價值が約束されないでは生きて行けないのが人間であります。そうして其價值生活は決して外に物的な世界をつみ上げることではなくて、心の内に開いて来る世界であります。眞、善、美、聖とは我等の求めてゐる價值でありました。

眞、善、美、美と三つは、はつきりとした區別をもつてゐます。善惡を取扱ふ倫理道徳は決して美を生命とする藝術ではありません。けれどもそれらは又深い關係を持つてゐて、無關係だとすることは出来ませぬ。

さて先づ私は道徳と宗教について考へてゆきます。

道徳と宗教ほど密接の關係のあるものはありませぬ。随つてこの關係ほど間違はれやすいものはありませぬ。しかし宗教は宗教であつて、道徳ではありません。倫理道徳は倫理道徳であつて宗教ではありません。しかしあまりにも密接なる關係を有するがために古來しばしば一つに考へて來ました又人間の心は一つに考へやすい傾向をもつてゐます。佛教でもこの道徳の臭味のとれてゐない信仰のことを要門と申します。宗教の中にはこの道徳を土臺にしたものもあります。倫理的宗教であります。よいことをすれば神に救はれる。或は善人となつたことが神や佛に救はれた證となるのであります。人間に一番よく彼得出来るのはこの教であります。

3

ですから多くの人は先づ宗教生活の第一歩を道徳生活にはじめます。さうしてよいことの出来る心の上に佛や神を見やうとするのであります。しかしながら宗教は宗教であつて道徳ではありません。

親鸞聖人はこの道徳的宗教に行詰つて、宗教と道徳とを全く別に考へたお方であり

ます。道德の世界は善悪の世界であります。善をはなれては悪もなく、悪をはなれては善もありませぬ。ですから善悪の彼岸は永遠に善悪であつて、善だけになりきることは出来ません。ですから善悪の世界にゐては、心が眠つてゐないかぎり行詰ります。行詰らないのは内省が足りないからであります。

如來の御救ひは實にこの善悪の囚はれから出されるのであります。其行詰りを解決して下さるのであります。如來の救ひは、善人も救はれ悪人も救はれ、智者も救はれ愚者も救はれます。一切を救ふのであります。

如來を信する………

といふことは善人の上にもなりたてば、悪人の上にもなりたちます。一切人の上に信するといふ世界が興へられます。如來の願力が衆生の上では信心となります。衆生の信心ご如來の本願とは一体であります。されば衆生の善悪に關係して如來の本願が助けるのでなくて、如來の本願の眞髓こそ信心であります。この如來の本願が我等の

信心の根幹であります。

宗教の世界の權威は、實にこの道德の世界を越えてゐる所にあります。丁度月が天上に輝いてゐるやうに、月が善人の上にも輝き、悪人の上にも輝くやうに一切の上に超越してゐるのが如來の救済であります。

如來は聖それ自身であります。人間の善をも添へることが出来ず、悪をもつても汚すことが出来ない。一切の凡小のはからひをもつてしては遂に汚すことも添へることも出来ないのが如來様であります。それが聖それ自身であります。聖は聖であつて、人間の考へた、善でもなく悪でもありません。この聖それ自身である如來様が我等の上に体験せられたのが信心であります。南無阿彌陀佛は如來の救済の全体であり、我等の信心の全体であります。

先日もある所で小學校長が私どもの講演を唯一席聞きに来て、『宗教の倫理化だ。』と言つて歸つたさうであります。多分、青年等に修養の話をしてゐたのを私の信仰

の全部でござもあるやうに思つたのでせう。私も今でも申してゐるやうに決して宗教と道徳とを一つには見てゐませぬ。宗教を家庭の治道具に思つたり、修養の手段のやうに考へたりしてはごうしても、宗教の眞髓にはふれることは出来ませぬ。随つて徹底した安心もなければ、輝きもありません。信仰には徹底した安心の一面があります。充された輝きがあります。如来の心と衆生の心とが一体になりきつた所には手のはなせる安心と心からの満足と、亡びない輝きがあります。他力眞宗においては特にこの道徳と宗教の世界がはつきりしています。親鸞聖人の信仰は絶對に道徳の上に超越しています。この道徳の上に超越することは、可なり信仰に徹底せなければ出来ぬことであります。しかし超越といふことは又大變な間違ひや考違ひを興へるのであります。

超ねると反くとの差異

超越するといふことは決して反くことではりませぬ。信仰は道徳を超越することは、

道徳に反いたことではありませぬ。反道徳と超越徳とは全く違つてゐます。

超越徳とは道徳をふくんでしかも道徳以上の世界にゐることでありませぬ。

善だの悪だのとそんなことはごうでもよい。俺は自分の勝手にやつてゆくのだといふのは反道徳の世界であつて、世界を風靡した自然主義の考方でありませぬ。

親鸞聖人が『本願を信せんには他の善も要にあらす、念佛にまさるべき善なき故に悪をおそるべからず、彌陀の本願を妨ぐるほどの悪なきがゆへに』と仰せられたのは、決して善なんかごうでもい、悪いことも勝手放題、氣ま、な生活をせよと云はれたものではありませぬ。

誠に我々の彼岸には永遠の光明、永遠の理想である阿彌陀如来があるのであります。この如来によつて照し出された我々の現實、其現實のすがたこそ罪惡生死の凡夫であり、悪人なのであります。其の現實の一切が如来によつて攝取されたのが、感謝であり、懺悔であります。超越するとは現實を棄てことではない。現實のありのまゝが攝

取せられるのであります。現實を如實に見てゆくののであります。

善惡の對立を棄てたのではなくて、善惡の對立があるまゝに超ねたのであります。超たのは反いたのでも、逃げたのでも、なくしたのでもなくて、眞に現實に生きたのであります。決して本願さへ信じたら、どんな惡をしてもいゝ、念佛さへ稱へたらどんな惡いことをしてもいゝのだといふのはちがひます。

如來の自利利他

眞に迷ふてゐる者は、迷ふてゐる自分を死りませぬ。狂者が狂者であることを知らぬやうに、生死におぼれ、生死に固つた者は生死を見ないのであります。

私どもは超越せねばなりません。生死や、迷ひに囚へられて何時までも輪廻をつゞけることは、私自身の死であります。私どもはごうしても救はれねばなりません。救はれるとは、この痛しい苦惱や、生死の中にあつても、これから超ねた日暮をさせて貰ふことであらねばなりません。

如何にしたらこの生死の囚はれから超ね、苦惱を超ねて生きることが出来るのでありませう。

一体智慧は光明であります。この佛の光明は煩惱を否定します。如來の光に照されてのみ我々は生死を生死と觀じ、迷ひを迷ひと知るのであります。この生死をてらし出して生死を否定する心はすぐ、暗の中から光に向ふ心であります。光は私をてらしめて私をして光にむかはしめます。私どもは唯此の光によつてのみ生死を生死と信じ、迷ひを迷ひと知るのであります。

如來は涅槃に住してゐられます。お淨土にゐられます。しかし如來は淨土に唯覺を樂しんでゐるやうな獨覺とはちがひます。利他の大悲に動かされて、生死の苦界に、御自身を顯現して、一切衆生を救ひます。誠に大慈悲なるが故に、淨土にゐて、しかも淨土にはゐないのであります。如來の活躍は唯一切衆生の惱む生死の海において、あります。一如法性の涅槃より生死に來生するは唯、この利他の大悲に動かされて

とすれば雪の道どころか、近所のお使ひすら退義であります。然るに雪の中にも自分を棄てて立てば、冷たいまゝに冷たくないのではありません。それは親の恩を感じ慈悲に生かされてゐるからであります。

眞にさやうとすれば、眞にしたがはねばなりません。

貧しさを眞に超えやうとすれば貧しさの中におちてゆくのであります。逃げやうとものがらずに貧しさの中に生きてゆくのであります。

因果の理法の中に生きて、一切を背負ひ、一切を抱きしめてゆく者こそ、一切をこねるのであります。

一切をこねさすのは如來の智慧のお力であります。智慧の光は私たちに正しい物の見方を興へて、私を大地の上に立たすのであります。親鸞聖人の地獄一定の体験、愚禿としての名告、善導大師の『我身は現に罪惡生死の凡夫』の深信、それらはすべて如來の智慧の光に照し出された、久遠の現實であります。この久遠の實現にかへつて

ゆく、そこに一切を負ふて光に歸命したほんごうの姿が生れて來ます。

『智慧なるが故に生死に於て生死におらず』とは如來のみよくするのでありますけれども、救はれた者も、身は生死に於つても、苦しみに於つても、苦を一身に抱きしめるが故に、よく苦惱をこねて生きてゆくのであります。

誠に苦をこねやうと思へば、進んで苦をになふことであります。父我を苦しめず、母我を苦しめず、其他一切人が我を苦しめず唯我を苦しめる者は我のみであることを思ふ時、我は一切を忍受せねばなりません。一切を自然に忍受する時にのみよく一切をこねるのであります。

菩薩道

大乘の菩薩は『極めては流轉を厭へども而も流轉に向ひ、涅槃を信樂すれども亦涅槃に背く。』と申されます。思ふに生死におつて生死におらぬは、智慧の力、涅槃を得ても涅槃にとまらずして生死に生きる利他の慈悲であります。智慧によつて自利し

若い者の大部分は戀に苦しむ。

夫に死なれ、妻に死なれて苦しみ。

姑と嫁が苦しみあつているものもあります。

全て人は様々な苦しみにおちいつて苦しんでいます。

さうして其のくるしみの原因を多くは他人にぬりつけて、自分が背負ひませぬ。

苦しみも自分が背負はないで、ごうにかして樂を受けやうともがきます。さうすることが決して樂しみを興へないでますますくくるしみを重ねさしてゆくのであります。

救ひと苦惱

私どもが眞に、苦しみをやすく渡りたいと思ふならば、信仰の人になるより外に道はありません。

信仰に入れば人間の苦惱が解決がつくとは、決して人間苦がなくなるのではありませぬ。

又人間苦を逃げたりさけたりするのでもなく、人間苦を抱きしめてゆく所に如來の智慧と慈悲とによつて超へさせて頂くのであります。

よく生死の苦惱をこねやうとすれば、くるしみに隨順せねばなりません。よく生死に隨順する者のみが、生死を超へるのであります。

よく生死の苦惱をそのまゝ、受入れて苦惱を苦惱として背負ふてゆくのは如來の慈悲の心が然らしむるのであります。慈悲は力の源であり命であります。如來の大慈悲の心がよく私等の力となりて苦しみの中にも生きてゆける廣い心を興へて下さるのであります。

雪の中を獨りの子供が跳足で走つています。『お前は何處へゆくのか。』と問ひますと『私はお母さんの病氣が大變悪いからお醫者様のところへゆきます。』と足を眞赤にして走ります。この少女は正しく雪の中にいます。雪の中に立たせてゐるのは母の愛の力であります。人は時にお便所に行くのすら退義であります。それがいや／＼出る

あります。

すでに如來は淨土にゐてしかも淨土にゐたまはぬのであります。しかし如來は決して生死に迷ひたまはぬのであります。生死にゐてしかも生死にゐたまはぬのは、如來は智慧の体得者にてましますからであります。如來や菩薩が、生死に住せぬのは智慧の力であります。

如來の大慈悲は利他の心であります。光より暗に來つて苦惱に隨順するは大慈悲のみよくするのであります。誠に如來は涅槃におつて涅槃におらず、生死におつて生死にゐたまはぬのであります。一切苦惱の衆生に隨順したまふが故によく生死を超へ、生死を解脱したまひ、よく生死を解脱したまふが故に、よく生死を救ひたまふのであります。

凡 夫

我等はもとより、生死になやむ凡夫であります。罪濁の惡人であります。衆生であります。その我等が救はれるとは、生死にあつても、如來の智慧と慈悲とに生かされることであります。如來の智慧と慈悲とに救はれるとは、よく生死におつて生死を超へさせて貰ふことであります。

誠に我等久遠の迷ひは、苦惱にたねかねて、この苦惱より逃げ、この苦しみを棄て、安樂を求めようとするのであります。自分の責任や業苦をふりすて、自分ひとりの平和を得やうとすることでありませう。貪しい者は貪しいことに苦しみます。金持は金のために苦しみます。子供のない者はないことに苦しみます。子供ある者は子供のために苦しみます。病弱な者は病弱を苦しみます。

慈悲によつて利他するのであります。この自利利他圓滿の世界こそ菩薩道であります。生死と別なる涅槃に逃避するは小乗の功利の心であります。生死を離れ、生死を捨てやうともかく者は、かへつて益々生死に囚へられます。眞に生死を生死と知つてしかも生死に囚へられないのは菩薩であります。

凡夫は眞に生死を知りませぬ。

眞に生死を生死と知らぬが故に生死を畏れませぬ。

生死を畏れませぬから、道を求むる心がありません。

生死を生死と知らず、迷ひを迷ひとも輪廻とも知らずして、

しかも苦をいとひ、苦をのがれ苦をさけることにのみつかれて、

遂に生死に囚へられて死んでゆくのであります。

菩薩は智慧に輝きます。この智慧の光りは、生死を生死と知り、

生死の實相を見ます。生死の實相を知るが故に生死に固着しませぬ。

念佛の世界

生死に固着しませぬから、よく解脱します。

生死を解脱するとは、よく生死に隨順することである。

生死を棄てずしてよく涅槃を得るのであります。

我等はもとより生死の凡夫であつて菩薩の智見を持たぬ哀れを知つてゐます。

唯念佛一つによつてこのまゝ救はれてゆく凡夫であります。

しかしながら、我等の念佛は、如來の救の名告であります。念佛は信心であり、やがて智慧であります。

かつては、自分の幸福を、私の周囲を改造し、私に與へられた隣人を色々、取變へて、私の氣にいるやうに、人と境遇とを變化改造することによつて私の幸福を得られるのだと考へました。其時には自分は棚にあげてあつたのです。自分は正しい、悪人ではない、といふ高慢さのために、自分をぬきにしてゐたのであります。

しかし念佛の世界にだして貰ふた時、そんなことが云ふてゐられなくなつたのです。私の世界の明暗を支配する契機は唯私の胸三寸にあつたのです。

私が私の世界の責任者であつたのです。

さうして逃避もならず、辯解もゆるされぬ、現實のありたけを抱いて如來のみ前に拜跪する時、私は私のありたけをおふて、抱いておちてゆくより外に道はなかつたのです。

信仰聖壇！ その上に立つた時だけ、私どもは一切のゴマカシとい、加減な妥協がゆるされませぬ。甘ねることもゆるされませぬ。

如來は久遠の光明であります。この久遠の光の前に出された時だけ、私どもは、酔ふことをゆるされませぬ。一切の偽善のめん、偽善の衣をはぎとられ、賢善の化粧をはぎとらて、久遠の我にかへつてあきます。

久遠の光明が、久遠の我によびかけます。この久遠の光明と久遠の我との間には、

薄紙一枚ばせられませぬ。凡小のはからひの一切が入れられませぬ。

然るに現今の信仰界をながめた時、痛ましくも、久遠の如來の大悲も、大智もそれが、人世久遠の迷執を打やぶる力を失ふて、同行たちは、徒らに安價なる感情の陶醉に自分をいつわり、悪人正機の利劍も、凡夫の迷執をぶちきるによしなく、感謝の化城にとゞまり、念佛の讃歌にねむるは多く同行である。たゞ功利主義の信仰の道具となつて、哀れ超世無上の大誓願も、老婆一夕の玩具となる。そもく一体誰の罪ぞ：

さめよ！ さめよ！ 一切を棄て、嚴肅なる如來久遠の智慧光の前に立て、如來は久遠の我にむかつて、今も『汝一心正念にして直ちに來れ！』とよびかけたまふ。

誰かこの如來のみ前に高慢のまゝ立ち得るものぞ。我々はたゞ生死流轉の我を其處に見出します。この永劫流轉の我『劫曠よりこのかた流轉して出離の縁なき』私の内觀こそ、生死を生死と知らしめる如來の智慧光であります。『おちる』といふも、機の深信といふも、つまりは、眞に我らが生死に隨順するすがたである。

ですから、おごろくべし、生死を生死と知れる其刹那に我等が永遠に如來の願船上に更生せる時であります。如來の大慈に攝取され、弘誓の願船上の往生人とならずして、凡人の体験はないのであります。

如來の大慈悲の懷にいだかれてあるが故によく生死の唯中に合掌します。念佛します。念佛は高き山の頂きに表れしすて、低き凡人の泥中においてあります。低き生死煩惱の泥中に我を見出す時、念佛はこの低き谷の底に咲き出でます。

無碍の一道

念佛者はよく生死に隨順します。

よく生死にしたがふが故に、

生死におつて生死を超えます。

生死を超ゆるが故に、生死にしたがふのであります。

「念佛者は無碍の一道なり。」

そのいはれいかんとならば

信心の行者には、天神地祇も敬服し、

魔界外道も障礙することなし。

罪惡も業報も感ずることあたはず。

諸善もおよぶことなきが故に、無碍の一道なり。」(歎異鈔)

とは生死にしたがふ者の生死を超越する風光であります。罪惡や業報から離れたのではない。苦惱を逃避したのではない。よく業報を背負ひ、よく苦惱を抱きしめる者のみ、其の谷底に開く無碍の一道を感ずるのであります。

心は淨土にあそぶ

朝明園寺住職松江師は、師の知人である、もと第六高等學校の教授、池山先生の夫人の信仰について語つて聞かされました。

話はかうである。池山氏の奥さんが胃を病んで岡山縣病院に診察を受けに行かれま

した。その時の診察の結果はイガンだと云ふ宣告であります。イガンは不治の病であります。控室にかへつた奥様は、今や死の巖頭につきおとされてしまつた自分を思つた時、一切からつきはなされた絶對の寂しさにおちきりました。夫も子供も一切が去つてゆく………と思つた刹那、床板諸共地下數丈の底におちてゆく………しかし其一念は長らく惱む信仰問題の解決のつく時でした。一念如來の大救濟にふれました。一切の疑ひはとれて其のまゝ救はれてゆく大安心に入りました。多くの病者が死の宣告を受けた時、方も氣も落ちてしまつて歩いて歸ることが出来なくなるのが常であるのに彼女は一層力づきました。そして平氣でかへりました。

更に奥さんは思ひました。

『主人でなくて私でよかつた。私が病氣でよかつた。とそれが一つ、次ぎには

この病氣でよかつた。イガンでよかつた。でないでこの救ひはわからなかつたであらう。』

と心中にひらめきました。泣くべき世界が笑ふ世界に轉じたのです。

それから後の死に至るまでの生活は實に悠々たるものであつたのです。靜かに死後を思つて主人のため子供のために、裁縫を急ぎ、取かたすけに精出して、遂には、銀婚式のかはりに送別の宴をはつて、近角常觀師其他の知人を招いて心よくお別れして歸るが如くやがて大往生をどげられたさうです。私は池山夫人の生活について多くを記憶してゐませぬが、これが信仰生活の力であります。一切の業にさからはすに荷つて全てを如來にまかせて生きてゆく相は、一面生死に隨順したのであります。苦からのがれやうどのもがきがありません。

さうして他の一面よく苦惱を超えてゐます。これこそ如來の智慧と慈悲とのよく然らしめるどころであります。

地上の一切を知つて、地上に眞に生きる愚者こそ、悪人こそ、やがて地上の一切を超えて、永遠の淨土に咲く花であります。

『超世の悲願きつしより

我等は生死の凡夫か

有漏の穢身はかはらねど

心は淨土にあそぶなり。』

この聖人の心からなる歌こそは、生死に住して生死におらず、心は永遠の淨土にあそびつゝ、しかも有漏の肉身を棄てぬ、信仰によつてのみゆるされる超越と隨順の一体なる法悦の世界であらねばなりません。

榮枯盛衰のまゝに

私どもは徒らに外的、物的な世界にのみ走つてはなりません。百萬長者になるもし、しかしながら、百萬長者必ずしも富める者ではありません。

私どもは貧しいことを恥ぢ、それを厭ひます。しかし貧しい者が必ずしも貧しいものではありません。

心の内なる世界一つでは、貧しい世界にも富める者以上の世界が開いて來ます。

こゝに一食の麥飯があります。口の富んだ者は、この麥飯の前に其顔をしかめるでありません。彼はこの麥飯に縛られたのであり囚はれてしまつたのです。『謹んで味の濃淡をどふこと勿れ、つゝしんで品の多少を論ずること勿れ、これはこれ保命の藥餌、飢と渴とを了すれば即ち癒る。若し不足の想念をおこさば、化して鐵丸銅汁となるべし……………』

一ばいの飯をも合掌して『如來の御用物をいたゞくよ』と感謝するものには、麥飯もそのまゝ百味の飯食です。私は徒らに感謝主義の信仰を宣傳する者ではありません。例を一ばいの麥飯にかります。よく一切に隨ふ時のみ、自然に道は開かれて、一切を超るのであります。

あまりに外部に求めずに、内の世界にもつと高い智慧の光が訪れねばなりません。でないで假令人間は千人が千人平等に百萬長者にして貰ふた所で幸福ではありません。

道は決して外的な改造によつて開いては來ませぬ。正しいもの、見方、世間のあるがまゝを抱して其上に私たちのほんとうの道を見出して行きませう。

旭の登るやうに榮ゆる家に生れ合はせた人もあれば、崩れるやうに亡んでゆく家に涙の生を持つて生れた子もある。人様々の身の上が人様々の生活をつくる。榮枯盛衰はまぬがれぬが人の世のさだめである。榮える日には榮ゆる中に、衰へる日には衰へる中に、それさながらの中に光を見つめることを忘れまい。

眞の信仰はこの苦惱のどん底に生れる光である。信仰は決して形の改造のためではない。亡びる身代を支へるためではない。体を強健にする手段ではない。病む日には病む日の微笑であり、迫害や、攻撃の唯中にあつてはそれをちつと受入れて静かに自己を培はせて頂き、讚美や幸福の恵まれる日には静かに自己を忘れずに、精進をさせて貰ふ光である。眞に現實の苦惱に隨順するにはものゝ正しい見方する智慧と力がある。信仰は力であり光である。隨順する者こそよく一切を超越する。

佛の怨敵

住 岡 狂 風

心の華

備後の鞆の津は景色のいゝ所であります。明圓寺の庫裡枕濤閣で、仙酔島に上る月を見るのは何とも云へぬ美しさであります。しかし鞆の津に行つて私の心をもつと和らかにほゝわまして下さるものは、明圓寺の住職松江師の人格であります。鞆の風景、枕濤閣のながめは外からの懾取であり、松江師の心の温みは私の心を内からほごぎます。内と外と一緒になつて、私は自由なくつろいだ世界に生かされます。

松江師は静かな信仰家であり求道者であります。飾つた所のない静かな座談、言葉や相ではなくて心の奥の謙虚と自然な法悦、窮窟さも、飾りもない師の全てが私には大きな無言の説法であります。

毎度私は平和な自然なお育てを受けます。凡人です。周圍に左右されないと思ひつ

、左右せられる凡人です。おなじ教化を受けても、心の扉をこちてしまつた時、尊い教訓でも憎悪にさわかはります。

ほんとうに心から凡人の生かされる世界は冷たい批判のメスのつきつけられる世界ではなくて、温い愛のたゞよふ所においてあります。それは凡人の悲哀であります。輕蔑や、攻撃や、嫉妬や、僞慢や、愚弄に包まれた教訓は、假令人は奮起せにしても、不純な動機を興へるのであります。兎んや劍の先きに蜜をつけてなめよどつきつけられた時は蜜をなめるより先に逃げてしまひます。無理往生に口に入れられたら、口を傷つけます。

眞愛は時に何よりもきつくなぐりつけるかも知れません。しかしそれが眞愛である時だけ、感謝します。そして生命は育ちます。

私どもは様々な教訓を他人に與へます。それがどれだけ深い愛に裏附けせられてあつたかを深く反省せなくてはならないと感じます。如何なる高級な議論も、明快な文

章や、流すやうな雄辯も、眞愛が無かつた時には全て虚假であります。何人も生徒であると同時に先生であります。

私は明圓寺様のやうなお方を澤山法の先輩として恵まれたことを感謝せずにはおられません。滅多矢鱈に、武装した人たちの中へ飛こんだ時、凡人の心が延びやう管が

ありませぬ。職ふのには、反逆するには、あまりに弱い者たちは、血涙さへのみま

法 執

『私も以前を考へると恐しい氣がします。前は日蓮宗でしたが、何これが第一の法じや、と高くどまつて他の一切を目下に見て、他の宗教を攻撃したり、邪魔をしたりしてゐましたが、それが其まゝ地獄への道でありました。それが今は彌陀の御本願に救はれました。』

鞆の同行村山氏はさう云つて念佛してゐます。今は有難いお同行で、鍛工場をしてゐますが、若い人たちも皆ひきつれて求道してゐます。村山氏が懺悔してゐるやうに

私たちは知らずして、法に執はれます。法に執はれることは人間最後の執着でありませう。宗教の美しい所は謙讓な態度であります。法に執着して高あがりしてゐる姿は其まゝ地獄への道であります。

法は我執の上にひきかぶるべきものではなくて、戴くべきものであり、執へるべきものでなくて、聞かせて貰つて私どもの心の世界を培つて行くべきものでありませう。如何なる高尚な議論も、尊い法も、それが自分の執着になつた時には、言ひやうのない臭味となります。學問的に正しさを求めも時には、厳しい批判も必要でせう。けれどもそれは學問の立場であり研究の立場であります。花を愛すると云ふので、花びらをもぎとつたり、オシベをひき出したりしたのでは、花それ自身は失はれてゆきま

す。
一切の法も信の中に溶された時だけ私たちのものであります。信に統一せられざる學問は高慢の種であります。

學問に對する考違ひ

歎異鈔の第十二節の後半を味はせて頂きます。

聖人は仰せられます。『いまの世には學問して人のそしりをやめ、ひとへに議論問答をむねとせんと、かまへられさふらふにや』

これは決して聖人御在世の時ばかりではありません。學問をすることが、人のそしりをやめたり、議論や問答をしたり、人に勝つために使はれたならば、それは大きなつまづきであります。

高座から他人を誹りつけたり、壇上から民衆をおごしつけたりするための學問ごたは、進んだ氣で實は地獄の道へとあやまつてゐるので『みづから信心かぐる』徒でありませぬ。『議論のごころには、もろくの煩惱おこる、智者遠離すること百由旬……』

……』學問は決して争ふためではありません。

本願には善惡淨穢なきおもむきを……

聖人は學ぶ者の心得として二つの事柄をのべてゐられます。

『學問せばいよいよ如來の御本意をしり……』

これは私どもが、自分の信念をおこさせて頂くがはであります。學問は手段であつて目的は、入信であり信相續のためでありまして、眞實の自利であります。自信教人信の、信心のがはであります。大いに學ばねばなりません。しかしそれは如來の御本意を知るためであります。

私たちの前に永遠にとちられてゐた淨土への扉が一念歸命の念佛に開きました。私どもは自然の淨土界中にまします如來のみ胸の中に藏はれてゐる久遠の祕密を知らせて貰ひます。御聖教の一言一句でもそれは單なる言葉ではなくて如來の血潮であり、御言葉であります。私にとつては魂の糧食であり念佛の味であります。

若し私が如來の御本意を知り、悲願の廣大のむねを存知させて頂くことをわすれて單なる研究ぎたになつたならば、私は如來を見失つたのであります。

學生の甲斐

聖人は仰せられます。

『學問せばいよいよ如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて、往生はいかゞなんごと、あやぶまんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをも、とききかせさふらはごこそ、學生の甲斐にてもさふらはめ。』

これは特に如來の大悲を宣傳する者への御誡めであります。學問は布教の根底であります。正しい學問は眞實に如來の大悲を傳へやうとする者のせなければならぬことであります。

しかしそれは、決して學問を傳へるためではありません。さきの御文をやはらげて申しますと、

『自分は罪惡の深い、いやしいものであるから、こんな身では、往生はとても出来まいなご、あやぶんでゐる人に、眞如一實の彌陀の本願には、善や惡や、淨さや

穢けがなさによつて變かはりのあるような相對さつてき的てきのものではなくて平等びんとうに救すくつて下くださる其そのおも
むきをも、とき、かせるのが、學問がくもんを研究けんきゅうする學者がくしゃの甲斐かひであります。』
如來にらいは絶對ぜつたいであります。善ぜんと惡あくが對立たいりつしたり、淨きよい穢けがないが差別さべつされたりしてはゐま
せん。一如いちじゆじあります。相對さつたいを超こえてゐます。さうした意味いみ深いふかことも知らずに、人
間心げんしんに囚とらはれてゐる人に、眞實しんじつの救すくひを説といて聞きかせるのこそ、學問がくもんする者ものの甲斐かひで
あるとの御おさとしてあります。

法の魔障

私わたしどもはひたすら學まなばねばなりません。しかしそれはどこまでも自信じしん教人けふじん信しんの世界せかい
をより生いかすためであります。それが名聞めいもんのためであつてはならぬのであります。し
かるに更さらに一歩いっほ進すすんで

『たまくなに心こころもなく、本願ほんがんに相應さうおうして念佛ねんぶつするひとをも、學問がくもんしてこそなんだ
と、云いひおごさる、こと、法の魔障まじやうなり、佛ぶつの怨敵おんてきなり。みづから他力たうりきの信心しんじんかく
である。

るのみならず、他たをまよはさんどす。つ、しんでおごるべし。』
お前は念佛ねんぶつしていても學問がくもんがないから駄目だめだ。學問がくもんがなくては救すくはれないのだ等なぞと
云いひおごすことなどは、法ほうを障さまたげる惡魔あくまにも等ひらしい仕業しぎやうである。佛ぶつに對たいしての怨敵おんてき
である。

如來にらいは人間にんげんの一切いっさいを超こえてゐます。信仰しんじゆは決けつして學問がくもんの淺あい深ふかいによつて定さだめらる
べきものではありません。如來にらい様さまを自身じしんの廻向けうきやうであつて、人間にんげんの小ちひなはからいによ
つて生うれませぬ。純粹じゆんずいに歸命きめいすることによつて如來にらいを領得りやうとくさせて貰もらつたのが念佛ねんぶつであ
ります。

『學問がくもんして出でかへて來こい』などと云いふのは、自分じぶんで他力たうりきの信心しんじんをかいであるばかり
でなく、他人たにんをまよはさんどするものであります。正法せうほうを誹謗ひぼうすることはおそろしい
ことであります。如來にらいの眞意しんいをあやまつて、自損じこん々々他道たうだうも知らずに、善知識ぜんちしきぶ
つて佛ぶつの怨敵おんてきとなることは更さらにおそろしいことであります。

たつた一筋道を精進させて頂く者のごもすればふみ迷ふ化城であります。念佛の世
界に精進させよう。

講演の豫定

六月十七日より三日間

二十二日より四日まで

二十五日より三日間

二十八日より三日間

七月一日より四日晝まで

四日晩より七日まで

廣島市鐵砲町佛教會館

主催 佛教自由協會

山縣郡 八幡村

山縣郡 戸内支部大會

安佐郡 飯室支部大會

山縣郡 加計町 溫井

山縣郡 加計町 大倉氏宅

本部例會

従前通り毎月一日、二日、三日の夜とす

消息

紙數の都合で、近頃ちつとも消息を書かないので方々からお小言を聞きました。ざつと五月から書きます

福山市光善寺永代經法會。四月三十日の夜を佐伯郡大姉村の學校で講演して一日にはもう福山市に來て光善寺で書席、人間業さと思へぬ敏活さでゆきました。參瀨紫瀨前講、三日間例によつて聴衆の粒より、愉快なる講演會。今の院主様は越後から來られた方で率直ない、方です。

市村支部大會。會場眞光寺、これでこの支部二回目の講演會、羽原支部長外青年の求道者がぼつ／＼出來て前途有望、夜席は満員

福山市青年訓練所。南小學校で青年訓練所及商工學校の生徒約二百名に對して「眞實生活」と題して一時間半、至極緊張した會、青年相手は何時と嬉しい。

川口支部發會式。九日夜川口小學校講堂に於いて、唱歌君が、校長勸語を讀、開會の辭を順を追ふて式をすまし、講演會に移つた。崇興寺さんを顧問にいたゞき、待來うんさこの新開の地に念佛を植はやうとするのである。全く信仰のないこの地に、光明の天地開

けよかし。十日夜まで崇興寺で講演會。夜は中井醫院にかへる。

本部例會十日十一日十二日、五月を一月この日に變へてした。以後は又一日より三日間

河内支部講演會、十三日より三日間、恰度町の招魂祭があつたり、金光教の高橋正雄氏の講演會を校長署長兩方の主催でされたのまつ／＼つたりして以前ほど聴衆はなかつた。花園悲風前講

府中濟世軍講演會、二十三日より三日間、芦品郡府中町は田舎に見られぬ、町である。なか／＼このあたりは十幾つの分隊があつて濟世軍の盛なる地である江草分隊長、慶照寺さん共にいゝ方で三日間を面白くすこした。最後の外は福山から中井先生一行自動車で乘込、共に夜中を福山へ――

額町明圓寺、二十六日より三日間、例によつてもう心安い人たちが待てて下さるので、ほんさうに打ちまけた講演會、思ふ存分話さしてもらつた。川口支部から三里以上の道を澤山同胞が來た。二十八日夜は満員の自動車も福山市中井宅へ。三十日本部歸還。

一日より三日間本部例會。「歸命」について語る。四日より八日まで本部に滞在、毎日お客様が多い。

現實の中から

一切群生は大地の上に惱んでゐます。其惱みの中から如來の誓願が名號となつて生れて來ます。一切群生のなやみは如來の惱みであります。この惱みが人間同志の業のはたしあひであることを知る時に、さうして靜かに胸にこの業を抱きしめて感ずる時に、ひた／＼と如來の誓願の有難さを感じます。如來誓願によつてのみ我等は痛ましい業を超えて自然の懷にかへると共に、痛ましい現實の中から建設されてゆく淨土を拜みます。

夜の街

寺で源齊勝氏の所に長くゐて、夜の更けた街を本部にかへりました。街の人は靜つてゐます。カフエーの女給と大道の中きたなく騒いでゐる青年があります。大道の唯中を歩きながら小便してゐる者もあります。よいどれが一人でやべつてゐます。暗の中、凡人は暗が訪れた時、悪事にたいして大膽になります。光の中では偽善者になります。可なり深い思ひにひたりつゝ念佛して夜の街をかへりました。

本團夏季大講習會

期日 八月四日より五日間

會場 備後 鞆町 明圓寺

講師 住岡主管 外一同

時は恰度眞夏です。會場は天下の絶景、新八景候補地として一二を争ふ鞆の浦、明圓寺の庫裡枕濤閣はこの風光を見下して四季共にほも言はれぬながめです。會員の全部は明圓寺に宿泊させて頂きます。特に明圓寺住職松江師は眞劍なる求道者であり信仰家であつて我等の常に尊敬してゐる方です。

天下の絶景、鞆の浦に遊びつゝ信仰の徹底を期せんとする人たちは、其支度で楽しくお待ち下さらんことを。詳細は七月號にのせます。

本誌 一冊 金拾 錢
定價 一ヶ年 金壹圓貳拾錢 (郵税共)

昭和二年六月十日印刷
昭和二年六月十五日發行

編輯兼發行人 花岡 靜人

印刷 人 花山 健二

印刷 所 光明團印刷部

廣島市八丁堀二十六番地

發行所 光明團本部

振替貯 金口座 下關貳叁〇八番